新舞鶴ＰＴＡ会報

第188号
新舞鶴ＰＴＡ
文化部発行
印刷：アシダ印刷

未来へのまなざし

ＰＴＡ会長　上羽　悠介

新年度が始まって早くも3か月。4月には少し大きなランドセルを背負った新1年生たちが登校し、学校に新しい空気を運んでくれました。学年がひとつ上がった在校生たちも、それぞれの役割や成長を感じながら、毎日を一歩ずつ積み重ねています。

今、２０２５年の夏を迎えようとしている私たちの社会には、大きな変化と期待が同時に存在しています。

例えば、今年4月に開幕した大阪・関西万博では、「いのち輝く未来社会のデザイン」をテーマに、世界中から人と技術とアイデアが集まっています。これはまさに、今の子どもたちがこれから生きていく社会を象徴するイベントです。

ＡＩの進化、気候変動、多様な働き方や学び方…。こうした変化のただ中で育つ子どもたちは、「新しい時代の担い手」としての可能性を持ちながら、私たち大人が思う以上にこれから不安や課題を感じていくのかもしれません。

だからこそ、今の学校や家庭、地域が”安心できる場所“であることが、これまで以上に大切だと感じています。

～変わる時代に、変わるＰＴＡのかたち～

ＰＴＡは、長年にわたって「役を引き受ける」「係になる」といった形で支えられてきました。しかし、共働き家庭の増加や家庭環境の多様化にともない、「手伝いたい気持ちはあるけど、時間がない」「役を引き受けるのは負担」という声も多く聞かれるようになっています。

そこで今年度から、新舞鶴小学校のＰＴＡでは、学級委員制度を廃止し、行事ごとにボランティアを募るスタイルへと切り替えました。

「できる時に、できる人が、できる形で関われるＰＴＡ」へ。

それが、私たちが目指す新しい関わり方です。

この変化の背景には、「誰かが頑張る」から「みんなで支え合う」という考え方への転換があります。

すべてを均等に分担するのではなく、小さな参加の積み重ねが、大きな支えになる。それがこれからのＰＴＡのかたちだと思っています。

そんな関わりが、保護者の方にとっても「学校とつながっている」という安心感につながれば、それもまた大きな意味があると感じます。

～子どもたちの未来に、やさしさのタネをまく～

ＰＴＡは、完璧である必要はありません。でも、子どもたちの未来のために「できることを少しだけ」持ち寄る場所でありたいと思っています。

子どもたちは、これから社会へと羽ばたいていきます。その時に、「人とつながることが楽しい」「助けあることは当たり前」と思えるように、今、私たち大人が見せられる背中があるはずです。

今はまだ子どもたちには伝わらないことも多いと思います。けれど、私たち大人の行動は、必ず子どもたちの未来で花開くことでしょう。

今年度もＰＴＡ活動を通して、子どもたちの成長を支え合いながら、笑顔があふれる学校づくりにご協力いただければ幸いです。

夏休みまであと少し。どうか体調に気を付けて、楽しい夏をお過ごしください。

欠点は”よさ“に

校長　亀井　敬介

インドの寓話に素敵なお話があります。「ひび割れの壺」というお話です。ぜひＰＴＡの皆様に紹介したい内容です。途中”壺（つぼ）“が会話をする場面がありますが、寓話ですので大きな心で読んでください。

インドのある水汲み人足は２つの壺を持っていました。

「人足」とは、物の運搬や土木工事などの力仕事に従事する労働者のことです。

てんびん棒の両端にそれぞれの壺を下げ、彼は水を運びます。片方の壺には、ひびが入っていました。完璧な壺が小川からご主人様の家まで一滴の水もこぼさないのに対し、ひび割れ壺はいっぱいまで水を汲んでもらっても家に着く頃には半分になってしまいます。

完璧な壺は、いつも自分を誇りに思っていました。なぜなら、彼は本来の目的を常に達成することができたからです。しかし、ひび割れ壺は、いつも自分を恥じていました。なぜなら、彼はいつも半分しか達成することができなかったからです。

2年が過ぎ、すっかり惨めになっていたひび割れ壺は、ある日、川のほとりで水汲み人足に話しかけました。

「私は自分が恥ずかしい。そして、あなたにすまないと思っている。」

「なぜそんなふうに思うの？何を恥じているの？」

水汲み人足は言いました。

「この2年間、私はあなたのご主人様の家まで水を半分しか運べなかった。水が漏れてしまうから、あなたがどんなに努力をしてもその努力が報われることがない。私はそれが辛いんだ。」

壺は言いました。

水汲み人足は、ひび割れ壺を気の毒に思い、そして言いました。

「これからご主人様の家に帰る途中、道ばたに咲いているきれいな花を見てごらん。」

てんびん棒にぶら下げられて丘を登って行く時、ひび割れ壺は、お日様に照らされ美しく咲き誇る道ばたの花に気づきました。花は本当に美しく、壺はちょっと元気になった気がしましたが、ご主人様の家に着く頃には、また水を半分漏らしてしまった自分を恥じて、水汲み人足に謝りました。

すると彼は言ったのです。

「道ばたの花に気づいたかい？花が、君の通る側にしか咲いていないことに気づいたかい？僕は君からこぼれ落ちる水に気づいて、君が通る側に花の種をまいたんだ。そして君は毎日、僕たちが小川から帰る時に水をまいてくれた。この2年間、僕はご主人様の食卓に花を欠かしたことがない。君があるがままの君じゃなかったら、ご主人様はこの美しい花で家を飾ることはできなかったんだよ。」

私たちはみんな、この壺のようにひび割れを持っています。子どものひび割れを見つけたとき、親や教師、周りの大人がしてあげられること、それは、ひび割れを責めることではありません。ひび割れをふさぐことでもありません。ひび割れから水がこぼれ落ちるその場所に、そっと花の種をまいてあげることではないでしょうか。短所に見えることでも見方を変えることによって長所にもなり得るのです。

子どもたちがまく水によって、それぞれどんな花が咲くのでしょうか。その日を楽しみにしながら花を咲かせる手助けができるよう心がけたいと思います。